

toyama design wave

富山で生まれる、次のデザイン。



2023



toyama design wave

富山で生まれる、次のデザイン。

富山県では、デザインの振興に早くから取り組み、総合デザインセンターを中心に、デザイン性に優れた商品の共同開発や販路開拓の支援、デザイン人材の育成など、幅広い取組みを進めてまいりました。

なかでも、デザインウエーブ事業は、優秀な作品の商品化を支援する「富山デザインコンペティション」を核とし、デザイン展や県内企業ツアーなど、多彩な企画を実施してきており、今回で34回目を迎えました。

今回の「富山デザインコンペティション」では、これからの社会や生活に必要なだと考えるデザイン提案を、ジャンルを問わず幅広く募集したところ、国内外から202点の応募をいただき、11月の公開審査会を経て、各賞を決定いたしました。

また、デザイン展ではコンペ開催30回目を記念して、今回

の入賞作品のほか、これまでに商品化された作品、コンペを契機に活躍の場を広げられたデザイナーなど、デザインコンペの歴史を一同に展示いたしました。

県では、富山県で暮らす人も訪れる人も幸せを実感できる「幸せ人口1000万〜ウェルビーイング先進地域、富山」の実現に向けて、各種施策を展開しています。デザインの活用など、クリエイティブな人材の活躍により、新たな産業や価値が創出され、そういう富山県に引き寄せられて、さらに多様な人材が集積する。そのような好循環を目指しています。

このデザインウエーブが、デザインの新たな方向性を見出すきっかけになるとともに、クリエイティブ人材の育成などデザインの振興や産業の発展、ひいては皆様の「ウェルビーイング」の向上に大きく貢献することを心から期待しています。

デザインウエーブ開催委員会
会長 新田 八郎



Contents

- 03 富山デザインコンペティション2023
- 05 入賞作品／ファイナリスト作品／入選作品
- 11 審査員講評
- 13 富山ものづくり視察ツアー
- 14 デザイナーズ ミートアップ
- 15 富山デザインウエーブ2023 デザイン展
- 17 過去コンペ参加デザイナーインタビュー
- 21 商品化プロジェクト
- 22 富山県内のデザイン関連イベント



TOYAMA DESIGN COMPETITION 2023

デザインコンペ 30回目の挑戦

1994年に始まった富山デザインコンペティションは、デザイナーと企業を結び、数々のヒット商品を生み出してきました。これまで多くのデザイナーが、富山での出会いをきっかけに、活躍の場を拡げています。30回目の開催となる今回は、応募者自身がこれからの社会や生活に必要なだと考えるデザイン提案を、ジャンルを問わず幅広く募集しました。



SCHEDULE スケジュール

6月19日～8月18日

応募登録・作品シート提出
(応募作品202点)

9月11日

1次審査
(会場：デザインセンター バーチャルスタジオ)
作品シートによる書類審査。

9月22日

1次審査結果発表
(公式Web)
ウェブサイトファイナリスト10名の氏名と作品タイトルを発表。

11月1日

最終審査・授賞式
(会場：ホテルニューオータニ高岡)
ファイナリスト10名によるプレゼンテーションが行われ、公開審査で各賞を決定。

11月2日

富山ものづくり視察ツアー
ファイナリストを対象に県内のものづくり産業を紹介するツアーを実施。

11月17日～27日

富山デザインウェーブ2023デザイン展
(会場：御旅屋セリオ 2F)
最終審査で選出された受賞作品およびファイナリスト作品を展示。

11月24日

デザイナーズミートアップ
(会場：高岡まちなかスタートアップ支援施設 TASU)
ファイナリストと県内企業のマッチングを目的に、先行事例を紹介するトークセッションと交流会を実施。

2024年～

商品化・プロジェクト化
デザイナーズミートアップをきっかけに、作品の商品化や新たなプロジェクト創出を推進。



グランプリ

HARVEST ハーベスト

<HARVEST>はワイングラスのようにステムとフットの付いたフードストレージのプロダクトシリーズです。スパイスなどを入れるのに適しています。まるで樹木のような形をしているので、異なる形のアイテムを並べることで森のようにスタイリングすることができます。HARVESTは収穫を意味しており、植物の実りを収穫するような体験で、日々の生活を彩ります。



山本 敦 YAMAMOTO Atsushi

1988年生まれ、京都出身。2015年京都造形芸術大学(現、京都芸術大学)卒業。2015～2022年に株式会社キュリオシティでデザイナーとして従事し、現在はフリーランスとして活動。

準
グランプリ

海の balan

富山県の豊かな海の幸にぴったりな、波の見た目をした海のbalanをデザインしました。具材のアクセントに差し込むことで、お弁当に鮮やかな大海原が出来上がります。海鮮料理の美味しさを引き立てる、新しいbalanの提案です。



小林 遣 KOBAYASHI Ken

1997年山口県萩市生まれ。2020年に名古屋市立大学芸術工学部を卒業。現在はインハウスデザイナーとして生活雑貨メーカーにて企画・デザインを担当。

審査員
特別賞

ラクに運べるバケツ

スタンダードな日用品である「バケツ」を機能の面から再構築しました。「水を運ぶ」という機能に焦点を当て、既存の製品の不満点を洗い出し、解決した一つの答えがこの作品です。



蒲生 孝志 GAMO Koji

大阪を拠点にしているフリーランスのプロダクトデザイナー。主に家庭用品・スポーツ用品・文具など身の回りのあらゆるプロダクトのデザイン・設計を行う。

学生賞



Plus プラス

Plusは一冊分を収納できる空間を新たに作り出すことで、読みかけの本や好きな本をいつでも取り出しやすい場所に置いておけるブックスタンドです。Plusを用いることでブックスタンドを動かさなくても、よく読む本や、毎日をするす日記、さらにはお気に入りの本をストレスなく出し入れすることができます。使う人がそれぞれの一冊を手の届きやすい場所にプラスすることで、新たなストーリーが生まれます。



木下 快 KISHITA Kai

大阪府出身。京都工芸繊維大学大学院デザイン学専攻。九州大学芸術工学部での学部時代には、製品や生活環境を計画・設計を学び、大学院では、より包括的な視点から幅広いデザインに取り組んでいる。今年の冬からロンドン芸術大学に留学予定。趣味は温泉巡り。

学生賞



藍染めの鯉のぼり

富山県魚津市鹿熊にある、南部歩美さんが営むaiyaの藍染めで作る藍色の鯉のぼり。「鹿熊の鯉のぼりは青い。」子供が少ないという課題を抱えた鹿熊で、子供達と、鹿熊と藍染めの出会いを作るプロダクト。絞り染めという技法を用いるので、絞りをを行う雇用も生まれ、鹿熊内の活性化も図ることができる。鹿熊の文化の一つとなるようなプロダクトを目指す。全く同じものはいできない、世界に一つだけの想いのこもった鯉のぼり。



平田 奈穂 HIRATA Nao

富山大学芸術文化学部芸術文化学科デザインコースに所属している。2021年に入学し、現在3年生で、2年次からデザインコースを選択し、ビジュアルデザイン、プロダクトデザインなどデザインについて広く学んでいる。

家護 かご



地震大国の日本の家庭では地震対策のために耐震の突っ張り棒を設置している事が多く、今ではインテリアの一部になっています。耐震突っ張り棒を販売する多くの企業はインテリアの中に溶け込むことを意識して白色でシンプルなデザインにしていますが、インテリアにマッチせず、空間の中で異質な存在となっています。家護は日本の伝統建築の一部である「組物」を元にデザインした耐震用の突っ張り棒です。空間の中で工芸品のような存在感を醸し出し、空間を彩ります。



片山 諒 KATAYAMA Ryo

1992年生まれ、多摩美術大学を卒業後インハウスのプロダクトデザイナーとして働いた後、スイスの美術大学院、ecalに入学。卒業後は企業に勤めながらフリーランスとして活動中。

in praise of light & shadow 光と陰翳を礼讃する



これは伝統的な日本家屋の障子に着想を得た、新しいタイプのキャビネットのデザインです。既存の襖の敷居に取り付けることで、スライドキャビネットになります。コンパートメントの多いこのキャビネットに物を展示することができます。一日を通して自然光の変化に合わせて周囲の障子や襖を調整すると、キャビネットとそこに展示されているものによって、面白い光と影のパターンが生まれます。また、夜には、人工照明で展示物を照らすと、異なった雰囲気演出する光と影のパターンが生まれます。季節によって移り変わる周辺の景色は、このキャビネットの素敵な背景になります。



タン チー シン Tan Chee Sing

シンガポール国立大学にて建築を学び、2005年修士取得。デザインの力が人々の生活を向上させるものと信じ、現在はマレーシアでフリーランスデザイナーとして、日々活動を行っている。サンワカンパニーデザインアワード、2019年Casa BRUTUS賞、2020年富山デザインコンペティションファイナリスト、2023年第58回セントラル硝子国際建築設計競技佳作を受賞。

Window Stand Sign ウィンドウ スタンド サイン



この『Window Stand Sign』は、家庭用プリンターと水性マーカーがあれば、誰でも簡単に大判ポスターのような高い訴求力を持つ広告を作ることができるというスタンドサインです。現在はコロナ禍の影響が緩和され、人々の外出が増えている状況です。この『Window Stand Sign』を使用することで飲食店の店先やオフィスの玄関先などの幅広い場所で自社の商品やサービスを効果的に発信し、顧客の関心を引きつけるのに役立つことを願っています。



福田 雄介 FUKUTA Yusuke

愛知県出身。多摩美術大学プロダクトデザイン学科卒業。KOKUYO DESIGN AWARD 2013 特別賞、iF賞、Topawards Asia、日本パッケージデザイン大賞 銀賞他。



SUN CHIMES サン チャイムス

富山の工業と聞いた時にはガラスが一番に思いつきました。そして同時に立山と富山湾といった豊かな自然も強く自分の記憶には残っていました。その2つの要素からプロダクトを提案したいと考え風鈴を提案します。サンキャッチャーと風鈴を組み合わせ、風や光といった自然を、より豊かに、より優しく感じさせます。立山から吹き下ろす風を受け美しい音を奏で、日本海側では貴重な晴れの日をより豊かに演出するプロダクトを提案します。



北條 英 HOJO Akira

マスパロダクトを主軸としてデザイナーとして活動。機構の仕組みや現象の成り立ちを中心にプロダクトを開発する。空間の豊かにするプロダクトを目指し使い心地や作り方も重要な要素として意識しプロダクトを造形する。



ネジクルポット

ドライバーは、あまり愛着を持たれる存在ではないけれど、それを愛される存在にデザインしなおす事で、長い間使ってもらえるデザインに。置物として部屋に置いても違和感のないドライバーセットです。部屋にインテリアとして置くことで、使いたいときにすぐ使うことができ、暮らしの一部として生活に馴染んでいくことを想定しています。実用的ながらインテリア性の高い見た目で、プレゼントにもおすすめです。



横山 友美 YOKOYAMA Tomomi

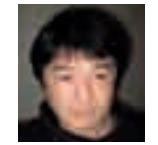
茨城県出身。金沢美術工芸大学卒業。卒業後は、腕時計・スマートウォッチのデザインに従事。2022年に独立。東京デザインデータベース登録デザイナー。フリーランス協会会員。デジタルハリウッド X ベネッセ X Adobe「デジタルクリエイター」講座講師。



厳選する定規

使いやすいサイズの定規であり、収納する筆記具を厳選する楽しみがあるペンケースです。市場の筆記具は15cm弱が殆どで、ペンケースもそれ用設計なので携帯定規も15cmに。定規をペンケース内に入れない場合、もう少し長い方が使いやすい、A4サイズを意識して。細長くした方が正三角形断面の剛性が活きるし、ペン収納効率もカバンへの収まりも良い。蓋をアルミ押出材として、樹脂弾性と自己潤滑を有する本体に嵌めさせる案も考えられる。

宇野 公二 UNO Koji



びっくり水器

麺やパスタを茹でる時の、鍋の吹きこぼれを防止する道具です。うっかり吹きこぼしてしまい味は悪いしコンロの掃除もと残念な思いをします。びっくり水と呼ぶ差し水の効果を再現する調理道具の提案になります。使い方は鍋に載せ氷を数個置きます。氷が解けてポタポタと水滴が垂れることで吹き上がる泡が溢れそうで溢れません。熱伝導性、耐蝕性、抗菌作用とリサイクルも容易な銅でオブジェのようなフランスパン型を試みました。

大崎 真弓 OSAKI Mayumi



tumu ツーム

中古家具の倉庫には端材、脚、天板などサイズの違う様々なモノが日々集まる。tumuはサイズも色も違う家具の要素を1つのボールに積み上げる体験を行うことで、使いづらさを感じる中古家具たちに愛着を持たせるアップサイクルのデザイン。天板や脚などを自由に入れ込むことで、ハンガーラックだけでなく机や椅子にも変化する。「積み木」のように家具で遊び、生活の中に溶け込む新しい家具のかたちである。

小西 なずな KONISHI Nazuna



tin ティン

心地よく時間を切り替える、メジャーの機構を用いて時間を刻むタイマー。目盛り付きの紐が巻き戻り、おりんのように金属同士がぶつかる音が鳴る。耳に優しい音色で凛と時間を通知することで、ストレスなく、それでいながら律された時間の使い方を実現する道具です。

春江 紗綾 HARUE Saaya 林海人 HAYASHI Kaito



立方体定規

定規には、直線を引く機能と長さを測る機能があります。「立方体定規」は、長さを測る機能に特化した定規です。ミニマムなサイズにすることで、つまんで転がして測ることができます。メモリという視覚的な要素だけでなく、感覚的な要素も加わり、より測るという行為に集中させます。さらに立方体であることで、三次元方向にどこまでも長さを測ることを可能にしています。

Y.O

大枝 柊斗 OEDA Shuto 吉田 慎平 YOSHIDA Shinpei



PICT. ピクト

ボンドもアイロンも使わない、第3のフェルト。小さなお子様にも簡単に扱えます。四角いピースを並べて、電子レンジでチンするだけで、しっかりとくっつける事が出来ます。コースターやキーホルダーはもちろん、オリジナルワッペンとして様々なものに貼り付ける事も出来ます。ブロックのように組み立てて、立体的な作品を作って楽しむ事も出来ます。

若原 徳広 WAKAHARA Tokuhiko



審査員講評 Judge's Comments

1次審査から最終審査までを担った3人の審査員に、今年の応募作品への評価や今後のコンペティションへの期待などを伺いました。



発想を完成形に着地させた作品を選出

今回も、発想や着眼点の素晴らしい作品が集まったと思います。しかし、富山デザインコンペティションは、単にアイデアだけを評価する場ではないと認識しています。プロトタイプを通してデザインの完成度や、商品化への可能性までを考慮し審査しました。ものづくりに真正面から取り組み、発想が完成形として美しく着地でできているかどうか基準となっている点が、このコンペの強みであり面白さであり、他のコンペとの違いだと思います。今回、我々が選んだ作品に関しては、その辺りがしっかりと実践されていました。少し残念だった点があるとすれば、我々が悩んでしまうほど挑発的な作品が、もっと出てきて欲しかったことでしょうか。

コンペティションですので、普段の業務ではできない世界観や価値を審査員にぶつけてくる。そんな勢いを期待していましたが、全体の印象として少し物足りなさもありました。それでも、グランプリの「HARVEST」は、新しいストーリーや、このコンペ自体の在り方を改めて提示してくれるものでした。作品としても美しい仕上がりで、洗練された生活シーンをも感じさせるデザインだと思います。準グランプリの「海の balan」は、そもそも「balan」を新たにデザインするという着眼点を評価しました。形状のモチーフや色などにもこれから展開を広げる余地があり、効率的な製造方法なども検討され、魅力的かつ完成度の高い提案となっていました。



安積 伸 AZUMI Shin プロダクトデザイナー／法政大学教授／A Studio Design Ltd. 代表
京都市立芸術大学卒業後、(株)日本電気デザインセンター勤務を経て、1994年Royal College of Art(英国王立美術大学)修士課程修了。その後ロンドンを拠点に1995年よりデザインユニット AZUMI として活動、2005年 a studio 設立。T-fal(仏)やlapalma(伊)など多くの国際的企業でプロダクトデザインに携わる。FX国際デザイン賞「プロダクトオブザイヤー」(英)をはじめ国内外で数多くの賞を受賞。審査員としてもiFデザインアワード(独)、グッドデザイン賞(日)、有田国際陶磁器展産業陶磁器部門審査委員長(日)など、多くの賞に参加。代表作「LEM」スツールのV&A博物館(英)収蔵をはじめ、各地の美術館に作品が収蔵されている。2016年より日本に拠点を移し、法政大学デザイン工学部システムデザイン学科教授に就任。大阪芸術大学、神戸芸術工科大学、秋田公立美術大学、京都市立芸術大学の客員教授を兼任する。

デザインの意図をしっかりと「伝える」ことが重要

1次審査では、全体的に小さなモノ、小さなアイデアが多いという印象を受けました。実際に最終審査でプレゼンテーションを見てみると、「なるほど、そういうことか」と納得して印象が変わりました。シートに収まりきらなかった意図を伝えることで理解できる部分が多数ありました。そこからいかにしっかりと「伝える」ことが重要かということを、身を持って感じています。最近よく思うのは、グラフィックデザインが強い時代だということ。一方でプロダクトデザイン側の立場としては、危機感を持っています。産地や企業の職人さんが減っていて、今後も日本でものづくりができるのか危惧しています。グラフィック要素だけで人々の生活が成り立つはずもありませんので、デザインの原点にあるものづくりの在り方を含めて皆様にも真摯に向き合っていただきたい。

そういう意味で審査員特別賞の「ラクに運べるバケツ」は、機能とか作り方とか実直に向き合っていたところが良かったですね。職人さんを通じた地域づくりの提案ということであれば、学生賞の「藍染めの鯉のぼり」はトータルデザインでの受賞です。地域デザインは若い世代が主になり、地域の中に入って何かを行い、それを周知する手段の一つとして賞を使うのは非常に有効な方法です。グランプリに輝いた「HARVEST」には、富山で商品化していただきたいという期待があります。紙一重で賞を逃しましたが、他の作品もブラッシュアップすればまだまだ良くなります。ここから商品化に繋げることも、デザイナーに求められるスキルですので頑張ってください。



塚本 カナエ TSUKAMOTO Kanae デザインディレクター／Kanaé Design Labo 代表
三菱電機(株)、(株)GKデザイン総研広島を経て1996年、英国王立芸術大学院大学(RCA)にて修士課程修了。1999年、Kanaé Design Labo設立。2011年に東京から関西に移転後、主とするインダストリアルクラフト的手法による日用品の開発と共に、その土地に副った町づくり・町興し・デザインの手法研究/実践を行っている。2015～17年、京都府立大学・准教授。RCA客員講師など大学の客員教授、日本大学、多摩美術大学、愛知県立芸術大学などの非常勤を務める。iF Design Award(独)審査員メンバー、Gマーク、美濃国際陶磁器デザインコンペなどの審査員を務める。RSAコンペ最優秀賞(英)、iF賞(独)、Red Dot賞(独)、DFA Award・銀賞(香港)、Dezeen Award/Short listed(英)など。

想像を超える視点に数多く出会えた今回のコンペ

今回は30回目ということで応募テーマを自由課題にしたのですが、非常に良かったのではないのでしょうか。不安もありましたが、我々が想像しないような素晴らしい視点がたくさん出てきました。テーマがあると想定範囲に収まりがちですが、「こんなところにもデザインする要素があったのか」というような新しい気付きもありました。本当にいいコンペになったと思います。来年は31回目としてこのコンペも新しくスタートを切りますが、実際の作品を作り手本人の言葉で説明することの大切さを改めて感じています。1次審査ではパネルを見て「弱い」と思ってしまった作品でも、ものづくりのストーリーを聞き、デザインした想いやモデルを見ると、全然違った印象になる。

そういう意味でデザインは、リアルに実践していくことが重要なのではないかな。グランプリを受賞した「HARVEST」は、現代的なシンプルモダンの生活シーンを想定したデザインが溢れるなか、日本のデザインに少ない本当の高級感ある暮らしを提案してくれる気がします。準グランプリの「海の balan」は着眼点や料理と色彩の関係性も新しくチャレンジし、「すし県」を打ち出そうとしている富山にふさわしい作品でした。限られた募集期間の関係で、発展途上の作品もあったと思います。制約がある中でも、グランプリと準グランプリには新しい世界観を予感させてもらいました。



岡 雄一郎 OKA Yuichiro 富山県総合デザインセンター デザインディレクター
金沢美術工芸大学工業デザイン学科卒業。日本電気(NEC)デザインセンター(1989-1997)アイシン精機(1997-2016)でデザイナー、ディレクターとして勤務。2016年デザイン&デザインコンサルタント会社TUG DESIGN Inc.を設立。企画から製品デザイン、プロモーションまで総合的なデザインを手掛けている。2017年4月より富山県総合デザインセンターのデザインディレクターとして従事。主な受賞に、Milano Design Award 2016 Best Engagement by IED(伊)、iF Design Award(独)、RedDot Design Award(独)、German Design Award(独)、Design For Asia Award(港)、Good Design Best 100(日)など。

ファイナリストが富山を巡るデザインの旅

富山ものづくり視察ツアー

デザインコンペティションをきっかけとした県内産業への理解促進を目的に、県内のデザイン関連施設を巡り、富山のものづくり産業とデザインの取り組みを見学するバスツアーを実施しました。

開催日：2023年11月2日(木)

視察先：富山県総合デザインセンター、株式会社能作、トトン、富山ガラス工房、富山県美術館



富山県総合デザインセンター

「デザイン」をキーワードに、①商品開発、②人材育成、③情報発信という3つの軸で、県内企業と地域活性化を支援する富山県総合デザインセンター。ツアーのスタート施設として、3DCADや3Dスキャナー、3Dプリンター、VR(仮想現実)機器を整備したバーチャルスタジオなどを視察・体験しました。



株式会社 能作

1916年創業の鋳物メーカーであり、近年は鋳製品などデザイン性に優れた自社ブランド製品の発表により国内外から注目を集めている能作。2017年に建設された社屋を訪れ、鋳造から仕上げまでを行う製造現場や、併設されているインテリア雑貨ショップなどを見学しました。



トトン

2022年、家具の循環(回収・再生・販売)を中心に、ライフスタイル提案の場としてオープンしたトトン。2階建て倉庫をリノベーションした施設を訪れ、ショップやコワーキングスペース、フォトスタジオなどを見学しました。



富山ガラス工房

富山ガラス工房は、ガラスのまちづくりに取り組む富山市で、ガラス造形作家の活動拠点になっています。一行は、実際に作品を制作中の吹きガラス工房や、併設のショップ、ギャラリーなどを見学。「富山といえばガラス造形」という印象を持つファイナリストも多く、同工房の設備や制作風景に触れる絶好の機会になりました。



富山県美術館

アートとデザインをつなぐ美術館として、2017年に開館した富山県美術館。美しい建築デザインと、立山連峰や環水公園など館内からの眺望も人気になっています。一行は、同美術館の副館長で、富山県総合デザインセンターの桐山登士樹所長によるプレゼン後、常設展や屋上庭園などを見学しました。



デザイナーと企業の交流イベント

デザイナーズ ミートアップ

県内企業とデザイナーのコラボレーションを促進する出会いの場創出を目的に、過去の商品開発事例を紹介するトークセッションと、県内企業とコンペファイナリストの交流会を開催しました。

開催日：2023年11月24日(金)

会場：高岡まちなかスタートアップ支援施設 TASU

●トークセッション講師

進藤 篤 (デザイナー・アーティスト)

佐野 秀充 (有限会社佐野政製作所)

瀧田 秀成 (有限会社へちま産業)



富山デザインウェーブ2023 デザイン展

富山デザインコンペティション30年の軌跡

今回のデザイン展では、今年度のコンペ優秀作品の展示とあわせて、開催30回を迎える富山デザインコンペティションの歴史を振り返る展示を行いました。コンペをきっかけに商品化した作品や30年の軌跡を綴った年表、取組みの詳細を閲覧できる報告書のほか、延べ8,000人を超えるコンペ参加者のなかから4組のデザイナーに焦点をあてた紹介コーナーを設置しました。

開催日：2023年11月17日(金)～27日(月)

会 場：御旅屋セリオ 2F



デザインコンペ開催30回に寄せて

富山デザインコンペティションは、お陰様で30回を迎えることが出来ました。長きに渡り継続することによって、「デザイン先進県富山」といわれるようになりました。そして、いつしかデザインセンターの核となる主要事業となりました。これまでご支援いただきました関係者の皆様、県民の皆様にご心より御礼申し上げます。

改めて記しますと、デザイナーの英知を富山に結集すること、県内企業をデザイン面でしっかりサポートすること、そして県産業として培った素材・加工産業をより高い次元へ導くことが当初からの狙いでした。その成果は充分達成することが出来ました。

しかしここにて、「100年に一度の大変革」と言われる時に直面しています。次の扉を開けなくてはならない状況が生まれています。デザインは実践あるのみ、先達の教えを胸に先を見据えて前進していきます。

デザインウェーブ開催委員会 実行委員長
富山県総合デザインセンター 所長
桐山 登士樹

過去コンペ参加デザイナーインタビュー

富山デザインコンペティション開催30回に寄せて

コンペをきっかけに活躍の場を拓けている過去コンペ参加デザイナー4組に、参加当時の思いやその後の活動についてお聞きました。



「MOUNTAIN」／㈱ジャクエツ
(デザイン:澄川 伸一)



「スーパーエクセレントバス」／TOTO㈱
(デザイン:澄川 伸一)



「conte」／一菱金属㈱
(デザイン:小野 里奈)

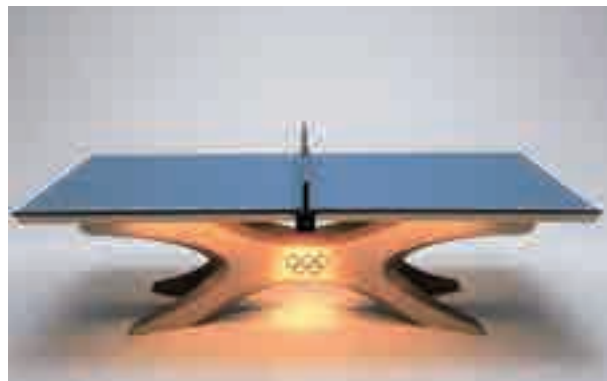


「瑞々」／小田陶器㈱、㈱深山
(デザイン:小野 里奈)

コンペの思想が、今も継承されているのが素晴らしい

応募当時のコンペの印象

澄川 デザインは、自分の中にとどめていても、ほとんど何の価値にもなりません。商品化されて初めて意味があるものです。そういう意味では、賞を選んで終わりというコンペが多いなか、商品化を前提としている富山のコンペは、応募する側にとって魅力的でした。実際に数多くの作品が商品化されている。世界的にも珍しいと思います。当時の黒木靖夫デザインセンター所長が「商品化しないと意味がない」とおっしゃっていました。その思想が今もしっかりと継承されていることが素晴らしいですよ。



「リオオリンピック公式卓球台」／㈱三英

受賞によるその後の影響

澄川 フリーランスになった途端、所属していた会社の看板がなくなりましたが、コンペでの受賞を機に知名度が高まったおかげで、デザイナーとしての社会的なよりどころが得られたように思えました。その後、受賞が続いたことで仕事の依頼も増えていきました。

流行に左右されない提案

澄川 第2回のコンペで受賞したサプリメントケース「pecon!」は、試行錯誤があり商品化まで10年近い時間を費やしましたが、世界中で販売することができました。「Aquarium」シリーズは、発売から30年以上を経過しても支持されているロングラン商品になっています。そう考えると、

割と長い時間軸でデザインと向き合っているのかもしれないね。あまりトレンドを追うことに興味はありませんし。それと、見た目や触った時のインパクトを大切にしています。言葉で説明しなくても直感的に理解できるものが、時代や国の違いを超えていくんだと思います。

県内企業の印象

澄川 富山県は、企業間の仲が良好ですよ。同じ業種だけでなく、異素材のものづくり企業でも横のつながりがある。また、高岡銅器の企業の方から、金沢の店舗で外国人観光客に人気があるという話を聞きました。富山のいいものは需要があるので、海外へ発信できるよう企業グループとして団結されるといいのではないのでしょうか。

澄川 伸一 SUMIKAWA Shinichi



プロダクトデザイナー／澄川伸一デザイン事務所 代表／大阪芸術大学 教授

千葉大学工学部卒。ソニーデザイン部本社とアメリカ勤務を経て、1992年澄川伸一デザイン事務所設立。3DCADと3Dプリンターを活用した機能的な曲面設計が得意分野であり、医療機器からプロ用一眼レフカメラ、児童遊具から伝統工芸まで扱うジャンルは広い。2020東京と2016リオオリンピック公式卓球台のデザインが世界中のメディアで取り上げられ、斬新なデザインが話題となる。グッドデザイン賞審査員及びユニット長を13年間歴任。二級建築士。ドイツIF賞受賞、レッドドット受賞、その他受賞歴多数。
■コンペ受賞歴:デザイン優秀賞(1995年)、とやまデザイン賞(2005年)

新しい人生が動き出すきっかけになったコンペ

コンペの受賞による影響

小野 受賞した当時、任期のある助手として大学に在職していました。大学を離れた後のことは漠然と不安に感じていましたが、コンペの授賞式で知り合った皆様から普段の仕事やデザインに対する取り組み方をうかがい、次の人生を踏み出すきっかけになったと思います。その後も、コンペの招待デザイナーとしてお声掛けいただいたり、ワークショップにも参加したりして、富山で多くの出会いが生まれました。今もその頃からの交流が続いています。錫製品の「KAGO」シリーズをはじめ、以後のものづくりのきっかけにもなりました。

コンペの受賞作品について

小野 デザイナーの気持ちだけではどうにもならなくて、商品化には至りませんでした。当時は未熟だったので、メーカーへの提案とか何をどうすればいいかわからず、仕方がなかったのかなと思います。それとは逆に(株)能作さんで商品化したKAGOは、当時の能作克治社長に「面白そうだから、取りあえずやってみよう」と言っていただいて実現しました。

素材に錫を選んだ理由

小野 ワークショップでは他の素材も選べたのですが、せっかくの経験なのでまったく触れたことのなかった錫を選びました。手で曲げられるほど柔らかいことは知っていましたが、思

い描いた形状を実際に鑄造して仕上げるためには、課題がたくさんあることを知りました。デザインセンターの皆様には、技術的なことをすべてクリアしていただき本当にありがたいと思っています。

KAGOが人気商品になった経緯

小野 最初は全然売れなかったそうです(笑)。売り場で平面のまま陳列しても変型するということが伝わらなくて。お客様に曲げてもらいたくても遠慮されるんですね。商品を壊してしまうんじゃないかと。そこで、手で伸ばしながら説明するような販売方法にしたところ、面白さが伝わって売れ始めたそうです。



「KAGOシリーズ」／㈱能作

小野 里奈 ONO Rina



プロダクトデザイナー／rinao design 代表

東北芸術工科大学大学院修了後、同助手を経て2007年にrinao designを設立。「つくる」ことや「使う」ことがいつもの暮らしに寄り添うよう、日本のさまざまな地域産業の担い手と共に正直なもののづくりに取り組んでいます。
■コンペ受賞歴:とやまデザイン賞(2004年)

富山デザインコンペティション開催30回に寄せて



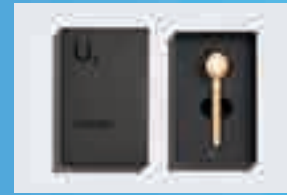
「金継ぎの指輪」
(デザイン: yonanp)



「焼き目と焼きまつげ」
(デザイン: yonanp)



「HAORI」
(デザイン: 進藤 篤)
Photo by Ryohei Maehara



「U, candy」/ 徇佐野政製作所
(デザイン: 進藤 篤)
Photo by Masashi Nakata

インハウスと外の世界を行き来する活動

ユニット結成と、コンペ応募の経緯

筆谷 私たちは大学の同期で、卒業後に別々の家電メーカーに就職しました。その後、しばらくして「何か面白いことがしたいね」という話になり、2013年にyonanpを結成したという流れです。当時は、実績づくりの方法として様々なコンペにチャレンジしていましたが、富山のコンペは賞をとって終わりではなく、企業とのマッチングなどその先の可能性を感じることができました。それが最大の魅力だと思ったのが応募のきっかけです。

三宅 その当時から、デザインセンターさんの取り組みやコンペの歴史などの情報がオープンにされていたと思います。コンペに関わったデザイナーの方々がどのような支援を受け、どういった経緯で成長していったのか想像しやすかった。そのあたりが見えたことも応募の動機づけになり、またその後のユニットの計画づくりにも役立ちました。

県内企業とのデザイン開発について

三宅 「KIKACARE」シリーズの場合は、(株)リッチェルさんが外部デザイナーと一緒に取り組みたいという実験的なプロジェクトだったと思います。とくにシリーズ第1作目は、その傾向が強かったのではないのでしょうか。

筆谷 確かに最初は、私たちがデザイン開発に携わる部分も大きかったと思います。ただ、いつまでも私たちがメインで関わるよりも、徐々に内製化されていく方がいいというスタンスで



「KIKACARE」/ 徇リッチェル

取り組みました。シリーズが展開していくうちに、社内メンバーが主導的に進めることが増えていきましたね。

インハウスでの活動やユニットとしての今後

筆谷 ひとつの環境や組織にいと視野が狭くなることがあります。自分の視野をより広げて可能性を模索することが重要ではないかと思っています。

三宅 インハウスデザイナーは、特定の分野に関する専門知識や、中長期的に開発できる能力が求められます。でも、広い視野で物事を捉えることも大切。専門性を超えていくことも、yonanpで活動する魅力といえるかもしれません。

yonanp(ヨナンペ) 筆谷 直揮 FUDETANI Naoki 三宅 諒 MIYAKE Ryo



パナソニック、ソニーのインハウスデザイナー2人によるデザインユニット yonanp(ヨナンペ)。金沢美術工芸大学を卒業後、2013年より活動を開始。
Toyama product design competition Grand prix(2014)、Special Recognition award(2018)、h concept DESIGN COMPETITION Second prize winner & Special Recognition award(2017)
■コンペ受賞歴: とやまデザイン賞(2014年)、黒木靖夫特別賞(2018年)

進藤 篤 SHINDO Atsushi



デザイナー・アーティスト
東京藝術大学大学院デザイン専攻課程修了。インテリアデザイナーとしてホテル・オフィス・商業空間等のデザインに携わる。個人プロジェクトでは、より無駄な眼差しを起点に、空間・インテリアオブジェクト・アート作品等、多岐にわたる作品を発表。日常にある物事を捉え直し、素材の新たな可能性や、根源的な美を探る。
■コンペ受賞歴: ファイナリスト作品選出(2019年)

アーティスト&デザイナーについて

進藤 両方の立場であり、どちらにも属さないという側面があるかもしれません。中間領域を目指していこうということで、このような肩書になりました。私の活動において、身近なものや素材などの見方を変えることで、新しい価値や気づきを生み出すという共通の目標があります。ですから、どちらの領域にもとらわれる必要はないと思っています。

富山の素材に関わった経緯

進藤 富山の魅力ある素材をリサーチする中で、あまり有名ではなくても良質な素材がたくさんあることを知りました。最初に着目したのがヘチマです。自然素材で何かをつくりたいと思っていましたので照明器具を提案しました。岩崎石に関しては、城壁や民家の石垣に使われていた素材なんです。砂岩でもろいため使われなくなっていました。でもテクスチャーが淡いブルーで美しいんです。屋外では耐久性が課題となる素材でも、インテリアなら使えるんじゃないかと思いブックエンドの制作に取り組みました。

ガラスと蜂蜜を組み合わせた意図

進藤 蜂蜜は水分が少なく糖分が多いため、腐りにくい素材といわれています。もともと食べ物をマテリアルとして活用できないか考えていました。蜂蜜自体のあめ色が美しく、溶けたと

きのガラスにも似ているので、きっと相性がいいと思って組み合わせました。

コンペ応募による影響

進藤 数々のプロジェクトが立ち上がったのも、このコンペがきっかけでした。富山のコンペは、30年の実績があり尊敬するデザイナーを数多く輩出しています。それに富山は、金属加工やガラスなどのものづくりが盛んで、デザインがしっかりと根づいた地域という印象がありました。自分なりに調べてみると、興味深い技術や素材がたくさんあり、何度も足を運ぶようになりましたね。

Photo by Ryohei Maehara



「LUFU」/ 徇へちま産業

デザイナー × 富山の素材と技術 × 商品化企業

商品化プロジェクト

富山デザインウェブをきっかけに、商品化された作品を紹介します。

Taroma アロマディフューザー

富山デザインコンペティション2021 準グランプリ受賞作品「Seed(シード)」



「Taroma アロマディフューザー」は、山田竜也さんのコンペ提案作品「Seed」の受賞をきっかけに、2021年のテーマ企業、前田薬品工業(株)との商品化プロジェクトに発展。DESIGNART TOKYO 2022 への出展を経て、同社が展開するアロマブランド「Taroma(タロマ)」より商品化されました。商品化過程では、300年以上の歴史を持つ富山の薬業と薬瓶の製造に由来する富山のガラス産業を再び結びつけた「Seed」の作品コンセプトをそのまま活かし、細部をブラッシュアップ。富山ガラス工房の協力を得て、薬瓶をモチーフにしたガラスの色、香りを拡げるフォルム、オイルを熱するパーツの安定性、キャンドルの光が映えるディテール等、空間を彩るアロマディフューザーとしての機能とスタイリングを追求しました。



山田 竜也 YAMADA Ryuya

1995年生まれ。金沢美術工芸大学製品デザイン専攻卒業後キヤノン株式会社にプロダクトデザイナーとして入社。その後PRODUCT DESIGN CENTERに参加。プロダクトデザインを軸に、アートピースやショーウィンドウのデザインなど、幅広くデザインを行う。

商 品 名：Taroma アロマディフューザー
ブランド：Taroma
メーカー：前田薬品工業(株)
サ イ ズ：Φ280×H223mm
価 格：250,000円(税込) ※受注生産

富山県内のデザイン関連イベント

イベントレポート2023

富山県内で開催されたデザインやクラフトに関連する各種イベントをご紹介します。

EVENT
1

市場街2023

●会期 9月16日(土)～18日(月・祝)
●場所 高岡市内各所



富山県高岡市の山町筋エリア、御旅屋エリアを中心に市内の各所で開催されるクラフト&アートの総合イベント。今年度で12回目を迎えました。富山の伝統産業職人や作家によるアート・クラフト作品の展示・販売のほか、ワークショップや地元グルメを楽しめるマルシェが開催されました。

EVENT
3

工芸都市高岡2023クラフト展

●会期 11月3日(金・祝)～5日(日)
●場所 御旅屋セリオ 2F



400年余りの歴史を誇る銅器・漆器の産地である高岡で、全国的にも珍しい、素材や用途を問わない総合コンペ「工芸都市高岡クラフトコンペティション」の入選・入賞作品を展示。金属、漆、ガラス、テキスタイル、家具など、様々な分野の優れたデザイン性で素材の魅力を引き出した、数多くの作品が並びました。

EVENT
2

富山デザインフェア2023

●会期 9月29日(金)～10月1日(日)
●場所 富山市民プラザ・デザインサロン富山



「TOYAMA ADC展」や「日本パッケージデザイン展」など、富山県内外のクリエイターや企業による作品のほか、全国の学生を対象にした「パッケージデザインコンペティション」の応募作品を展示。会期中にはデザインセミナーなども開催され、デザインの魅力に触れることができる3日間となりました。

EVENT
4

第63回富山県デザイン展

●会期 11月10日(金)～12日(日)
●場所 富山県高岡文化ホール



デザイン技術の高度化と産業振興を目的として始められ、今年で63回を数えるデザイン展。富山県知事賞には山口久美子さん・門嶋隆祐さんの「とやまふおんと」、学生大賞では奥田芹奈さんのグラフィック作品「時」、学生建築デザインコンペ部門では長岡造形大学丸型ポストの会6人による「あたりえ+++」が最優秀賞に選ばれました。



富山で生まれる、次のデザイン。

toyama design wave

発行日	2024年2月26日発行
編集・発行	デザインウエーブ開催委員会
事務局	富山県総合デザインセンター 〒939-1119 富山県高岡市オフィスパーク5番地 TEL.0766-62-0510 FAX.0766-63-6830 ホームページ dw.toyamadesign.jp
主催	デザインウエーブ開催委員会(富山県、富山市、高岡市)
共催	(株)富山県産業高度化センター (一財)富山県産業創造センター、(公社)富山県デザイン協会
後援	経済産業省中部経済産業局、(公財)日本デザイン振興会、 (公社)日本インダストリアルデザイン協会、 北日本新聞社、富山新聞社、読売新聞北陸支社、 日本経済新聞社富山支局、 富山放送 、 北日本放送(株)、富山テレビ放送(株)、(株)チューリップテレビ
監修	桐山登士樹
編集・構成	藤田忠彦／岡雄一郎／山田安宏／窪英明／堂本拓哉／ 吉田絵美／平野尊治／板野雄太／干田容子／溝口千賀子
クリエイティブディレクター	吉崎真弘
デザイン	三箇辰樹
ライター	上坂真紀
撮影	室澤敏晴
印刷・製本	能登印刷(株)